

【 図画工作科 】 教科提案

『 “感じる” “表す” 学びの連鎖 』 ～自分らしい表現を求めて～

1. 研究テーマの設定

(1) 学校提案とかかわって

本来、子どもは自分の思いや願いを絵にしたり、形に表したりしたいという表現の欲求をもっている。その欲求を満たしていく過程で「もっと自分らしく表現したい」という新たな願いをもち、造形活動の様々な場面で自己決定をし、自分の表現を求め、自分のよさを思う存分発揮しながら自分自身を高めていく。このように、自分らしい表現をつくり上げる中で味わう心地よさや満足感、成就感は、自分の存在を確かめることにもつながると考える。そこで昨年度図画工作科では、「持てる力を発揮し、心地よさを味わう図画工作科学習」というテーマで研究を進めてきた。

そして、自分の存在を確かめながら、題材・素材・道具との対話や、自己内対話であたためた学びを主体的・創造的にひろげ、仲間の造形感覚や感性に共感したり、違いを認めたりする学習をめざしてきた。そんな昨年度の研究の中で明らかになったものは、「つくりだす喜び」を味わう過程で、その心地よさ（※右記参照）は前提となるものであるということであった。

○子どもが心を開き、一人一人がもっている思いや願いをふくらませ、具体的な形に表すために自分らしい表現方法や色合いなどをつくりだす心地よさ。
○自分の思いや願いを表現できた喜びや満足感を仲間に出出するときの心地よさや、自分の思いや願いを受け入れられることで感じる心地よさ。

自分の思いを素直に表現する図画工作科の造形活動は、主体性なくしては存在しない。個々の主体的な活動の過程において「創造的に思考する力や豊かに表現する力などの主体的な能力」が育まれていくことは学校提案にも述べられている通りである。子どもたちは、表現活動の過程で様々な思考し、「自分らしい表し方」を求めていこう。子どもたちが願う「自分らしい表し方」とは、完成した作品のみをその対象と考えるものではない。題材と出会い、試行錯誤を繰り返しながら表現の内容や方法を生み出していくすべての過程の中で意識されるものであり、子どもたちは幾度もやりなおしながら自分の思いを表そうとする。すべてが自分の選択であり、決定である。だからこそ自分の思いにあった表現、「自分らしい表し方」ができたときの「つくりだす喜び」は大きいのである。

子どもたちが「自分らしい表し方」を意識する場面として、次のようなものがあると考えられる。

- 題材に出会ったとき、感じたことや経験したことを基に自分なりの発想やイメージをもつ。
- 自分の発想やイメージに合った材料や用具を考える。
- 材料やその組み合わせを考えたり、つくり変えたりしながら、試行錯誤する。
- 友達の表現のよさやおもしろさに触れ、自分と比べたり刺激を受けたりして、自分の表現を見直す。

このように、一人一人が「自分らしい表し方」を意識することは、資質や能力を生かした主体的、創造的な造形活動に取り組む子どもを育むことに結び付くと考える。そこで、今年度の研究テーマを

『 “感じる” “表す” 学びの連鎖 』 ～自分らしい表現を求めて～

とした。子ども一人一人が自分らしい表し方を求めて、「感じる」ことを大切に、「感じた」ものを「表そう」とし、また、「表した」ものから「感じ」、そこから思いうかんだものをつけたしたり、つくりかえたりしてまた「表し」・・・というように学びが連鎖する学習を目指していきたい。

(2) 図画工作科でめざす子ども像

～造形的な表現やまわりの人に関心を持ち、

自分なりに感じとる力や自分らしい造形的表現力をもっている子～

子どもたちは新しいものへ向かっていくたくましいエネルギーをもっている。造形活動に取り組む子どもは、手や心、体全体を働かせ、思いを膨らませながら夢中になって活動している。それは「もっと自分らしく表現したい」という願いの表れでもある。そんな、自分の歩みを振り返りながら、より一層自分ら

しい表し方を探ったり、自分の表し方に自信をもって積極的に表現したりする子どもを育てたい。そして、造形的な表現やまわりの人から感じとり、感じたものを表すことを繰り返しながら、学びがふくらみひろがっていくと考えている。

2. 図画工作科における「互いのまなざしが響き合う学習」

『互いのまなざしが響き合う学習』とは、友達と積極的にかかわりながら、友達がいるからこそ自分も成長できるということの大切さが内在している。図画工作科においても「共に学ぶ」ことから、ものや人との関係を積み上げていく「共感性」や「社会性」、「コミュニケーション能力」が育まれる。この「共に学ぶ」学習、友達と一緒にする活動は、子どもの資質や能力が働き、伸びる機会のひとつである。友達の活動する様子を共感的に受け止めたり、そこから新しいアイデアを思いついたりしながら、自分の力を働かせ、伸ばし高めていくのである。友達の表現や活動を「みる」ことで、自分との違いに気づき、それが次の表現や活動への原動力となっていくことも多い。一人一人が思いを活かし表現、活動する中から、互いの表現や活動を意識し、「みる」力を活かしながら表現や活動を変化させたり、さらにひろげていったりすることができるのである。そうして材料や場所、活動を共有しながら、友達の表現から刺激を受けたり、友達の表現に影響を与えたり、自然に友達と一緒に表現することを楽しんだりして、お互いのよさを交流しあう姿が生まれる。それは、子どもたちが表現の喜びを分かち合いたいという思いの表れであるといえる。

図画工作科の学習には、子どもたち同士がはじめに同じ立場で題材に出合い、活動や表現をスタートさせることができるよさ、必要な素材や材料、道具や用具を共有したり共同で使ったりすることから、子どもたち同士が互いに関わり合いやすいというよさがある。このような点から、図画工作科における『互いのまなざしが響き合う学習』の素地として、子どもたち同士がかかわり合いやすい環境づくりや自分らしい表し方を求めるのによいヒントが友達の表現や活動の中にもあるという意識のはたらきかけ、友達の表現の良いところはどんどん自分の表現に取り入れていってもよいという雰囲気づくりを心がけたい。そして、同じ空間と時間を共有した友達だからこそわかることをもとに認め合えるようにすること、互いのよさや違いをいろいろな観点から見て認め合えるようにすることが大切であると考えている。

図画工作科における『互いのまなざしが響き合う学習』を、昨年度の実践である1年生の題材「ならべてつないでたのしもう」の中の具体的な場面を例にして述べる。

《実践例》この題材は、身のまわりにある材料を活かし、“ならべる”“つなぐ”といった、造形的な行為そのものを楽しむことから始まり、ならべ・ならべかえ・ならべつづける中で、自分らしい表現や活動をひろげていくことをねらいとしたものである。そしてその中で、全身的な活動、イメージのひろがりや色や形のバランス、場所や友達とのかかわりなどの関係も表れてくると考えていた。その学習の2. 3/4時、中庭で活動していた時の一場面である。数名の子どもたちがまわりの様子を眺めるうち「ここに人をならべたい」という表現欲求を持った。その際「そのためにどうしたいか」をたずねると、「ならべるには人数が必要」という答えが返ってきた。そのアイデアを考えた数名でならんでも“ならべている”感じがしないのだという。そこで、個々に活動の最中であるが、みんなに呼びかけてみようということになった。そしてみんなを集め「人をならべていうのをしたんだけど、いっしょにしてくれる？いいよっていう人だけでいいから。」と呼びかけた。(写真1)最後の「いいよっていう人だけでいいから。」という言葉には、他の友達の活動も大事にしたいという心が感じられ、友達が今夢中になっている活動は止めたくないが、もしよければ自分たちの表現に賛同して協力してほしいという思いが表れていた。すると、その呼びかけに賛同した子どもたちが次々に中庭に寝転んで並び出した。(写真2～4)そして、子どもたちがそれまでにならべたりつないだりしてきた表現のそばに、人を“ならべた”様子が表現された。言い換えると、“ならんでいる人”



写真1



写真2

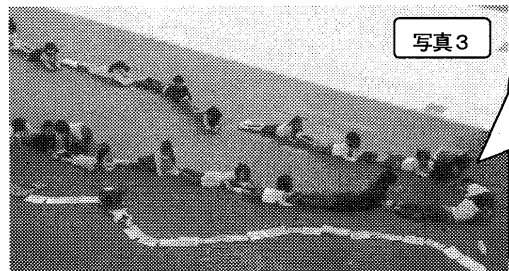


写真3

“人をならべている”
表現を展開中…



写真4

体をまっすぐに伸ばしてうつ伏せになり、前の人につながって…

ここで引き出された学習は、図画工作だけでなく様々な学習の局面を持っている。数名で並んでも“ならべている”感じがしないというのは、算数の力、数の概念が働いているし、“ならんでいる”人を表現するのは造形的な見方であるが、みんなで“ならんだ”行為は、体育の身体表現にもつながるともいえる。このように、『互いのまなざしが響き合う学習』の場面では、教科の枠をこえ、他教科や他の領域にも及び、子どもたちの学習がひろがることもある。

3. 研究の展望

(1) 学習のあり方

図画工作科における学習は、造形感覚を十分働かせることができる授業展開や場の設定が必要とされる。一人一人の表現過程を考慮し、試行錯誤を繰り返す時間や場を十分保障することによって、造形活動における成就感や満足感を味わい、次の活動に対する見通しや意欲をもつことができると考えるからである。

学習を計画するとき、子どもに育みたい力を明確にすることが必要である。1. (2)でも述べた、図画工作科でめざす子どもを育てていくことを軸とし、子どもの造形的な育ちを促すことができるような学習を計画していきたい。子どもの意識の流れを大切に学習展開、自分の表現や活動に対する振り返りの場や時間の位置付け、互いの思いや願いを伝え合う交流の場の設定などが重要となる。

① 題材設定のポイント

子どもたちが出会う一つ一つの「題材」は、学習をつくっていくもととなるものであり、「題材」によって子どもの表現意欲が喚起されることも確かであることから、下記のポイントを大切に設定したい。

- | | |
|--|---------------|
| <ul style="list-style-type: none">・子どもたちの思いや願いが膨らむような魅力的な(色や形、材料や場所を扱った)題材
…子どもの五感をゆさぶり、からだ全体を通して取り組めるもの・表現活動をひろげていく可能性をもつ題材
…子どもが“もっとしたい”“次はこうしてみたい”と感じられるような課題意識のあるもの・一人一人が自由に試行錯誤でき、自分らしい表現方で追究することができる題材
…自分の表現(材料、用具、方法など)が多様に選択できる学習過程が設定されているもの | 題材設定の
ポイント |
|--|---------------|

② 題材構成・題材間のつながり

先に述べたように、図画工作科において「題材」は、重要な存在であることから、これまでも設定のポイントを挙げ、一つ一つの題材を大切にしてきた。しかし、昨年度の実践を振り返ったときに、子どもたちの一人一人の継続的な育ちをめざすとすれば、題材間のつながりが必要であったのではないかという反省が生まれた。そこで今年度は、題材設定のポイントをふまえた上で、図画工作科でめざす子ども像を軸とし、すべての題材において連続的に力を育てていくという見通しを持ち、そのためにはどのような題材がよいのか、そのような配列がよいのかを考えていきたい。

(2) みとりと支援

① みとり

子ども一人一人の見方や感じ方、表現方法、そして、その学習過程を大切にする図画工作科の学習では、教師がさまざまな活動の場面をとらえて、一人一人の思いをみとり、どう支援するかということが、学習のひろがりや深まりを左右したり、子どもの意欲の高まりに影響したりする。子どもの丁寧なみとりと適切な支援が必要不可欠なものとなる。一人一人の子どもがもっている思いや願い、表現のすべてをその子どものよさとして認めることによって、子どもはのびのびと思う存分造形活動を楽しむことができるだろう。子どもの歩みを多面的、継続的に見ていくことが重要である。

子どもたちのつぶやきは、心の動き、その子の見方や感じ方の表れである。それらは、支援の重要な手がかりとなる。板書して、記録として残したり、全体に必要な気づきが含まれているつぶやきは活動の大切な要素になると考えられるので、学習の中で意図的に取り上げたりしたい。また、活動の様子やその表

れとして生まれてくるもの（作品）を記録することは、子ども自身が活動の過程で自分の表現を確かめることができるとともに、後でその記録を通して活動や表現を振り返ることができるというよさがある。そして、学習の中で持った思いや願い、悩みを絵や言葉、文章にして残していく図工カードは、子どもの学びの足跡となっていくものである。それを活かし、子どもの思いや活動の進み具合、また、つまずきや悩みを知ることができ、子どもが必要としている場面をとらえて、言葉かけや技能的な指導を行うことができる。つまり、子ども自身が次の活動や表現を進めていくのにも活かされるのと同時に、教師が子どもの見方や感じ方、表現や活動をみとり、適切な支援や指導を考えるのに活かすことができるのである。

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの反応や表情、つぶやきを板書したり、全体の場に取り上げたりする ・子どもの表現や活動から生み出されるものや出来上がったもの、作品等を記録する（写真、ビデオなど） ・図工カードを効果的に活用する …自分の表し方やこれまでの歩みを見直す場と時間 	みとり
--	-----

②支援

一番大切にしたいのは、「子どものよさを育てていく」支援であるという考え方である。個のよさを生かし、子どもの活動に寄り添ったものであることである。そこには、学習場面での間接的、直接的な教師の働きかけ、個や状況に合わせた材料や用具の吟味、活動場所や時間の保障なども含まれる。

<ul style="list-style-type: none"> ・小さな気づきに耳を傾け、受け入れる構え ・つまずきや悩みによりそい、受け入れ、いっしょに考えていく構え ・意欲や関心が高まるような励まし、子どもの活動への共感、見守り ・よさを認める言葉かけ、賞賛 ・子どもの求めに応じ、タイミングを見計らった技能的な指導 	支援
--	----

また、支援は学習全体をおおうものだけでなく、段階にあわせたもの、例えば学習の展開において「発想」「構想」「表現」などの場面において行うものがある。以下に段階別の支援を挙げる。

ア. 「発想段階での支援」

題材の導入段階だけではなく、子どもの活動が停滞した場合など、すべての造形活動の場において行う必要がある。題材名はもちろんのこと、音や映像などの目や耳への感覚刺激のほか、材料などから受ける触感やにおいなど、多くの刺激が発想の手がかりとなる。また、教師は対話的なアプローチを大切に、子どもの方向性が見えるまで、子どもの言葉を補いながら発想を刺激していくことが大切である。

<p>○言葉による発想支援</p> <p>いろいろな言葉を組み合わせ、子どもの想像が広がるような声かけをしたり、問いかけたりする。柔軟な思考から自分なりの考えを導き出すことがねらい。</p> <p>○条件を設定した発想支援</p> <p>条件設定をする。技能差を少なくしたり条件を作ったりすることによって、逆に様々なことに気づき、考えるようにすることがねらい。</p>
--

イ. 「構想段階での支援」

その子の既習の経験や内容を活かし、言葉でイメージを思い浮かべたり、アイディアスケッチをかいたりしながら表現を具体化していくための支援である。図工カードの利用や多様な材料経験は、発想の手がかりとなるだけでなく、子どもの構想への支援にもなるといえる。

ウ. 「表現過程での支援」

子どもが表現に熱中できるような手立てを考え、子どもの活動を共感的に見守ることによって、自信をもって粘り強く取り組むことができるようにするものである。時間の保障、材料や友達とのかかわりを考えた場の工夫も重要である。

このように、みとりと支援が一体となって働き、子どもの学びを支えるようにしたい。そして、一人一人への確かなみとりと支援が実現できればと考えている。